

私の生まれ育った下町には古い図書館がありました。明治か大正時代に建てられたと思われる洋館でした。今のような開放的な場所ではなく、受付で入館時刻、来館目的、住所氏名をカードに記入し静かに時を過ごし、帰る際には受付に寄り、退館時刻を先のカードに記入するといった具合でした。とても小学生が気楽に訪れる場所ではありませんでした。

そんな私の密かな楽しみの一つは、職員の方に会うことでした。当時流行っていたアメリカ漫画の主人公ベティちゃんに良く似た雰囲気のお姉さんでした。いつも姉と一緒に行くのですが、二人の間では「ベティちゃん」と親しみをこめて呼んでおりました。今でもそのころが懐かしく思い出されます。現代の図書館は、どこも明るく開放的で気安く訪れることができます。私にとつて憩いの場であり癒しの場であり、なくてはならない生活の一部です。また、パソコンを使えない私にとって職員の方の親切な対応は非常に助かります。題名も著者もわからない本

わたしと 図書館



堀 邦子

を私の拙い説明だけで探していただいたり、サークル活動で必要な本を取りそろえていただいたりとお世話になっていきます。

ここ数年来の楽しみの一つに図書館めぐりがあります。都内でも地方でも、出かけた際に近くに図書館を見つけると必ず立ち寄りま

す。やはり最初に目につくのは児童書の本棚です。子どものころには無かった多くの絵本類が数多く展示されていて嬉しくなります。子どもの目線にあわせて見やすく置いてあったり、小さな椅子が設置されていたり、はたまた座ったり寝そべったり(行儀は悪いですが)と自由に過ごせる畳敷きの部屋があったりと各

館で様々な工夫がされています。本来、図書館とは静かに本を探し読む所かもしれませんが、将来を担う子どもたちのためには遊びの場としての図書館は必要な場と思います。限られた予算と空間の中で、多くの蔵書の展示と子どもたちのための場所の確保は至難の技かもしれませんが、私の最も期待していることでもあります。

特集にちなんで、市民の方に原稿をお寄せいただきました。

読み方調べ

松井陽子

図書館ハンディキャップ・サービスの音訳に携わっています。音訳ですから常に正確に読むことを心がけています。レファレンス・コーナーで下調べをしています。なかでも悩むのは人名と地名です。

『幕末入門』(中村彰彦著)を音訳した時には二百名を超す歴史上の人物の名前の調査に時間をかけました。『人物レファレンス事典』『歴史人名よみかた辞典』(以上日外アソシエーツ刊)『明治維新人名辞典』(吉川弘文館刊)のほか『新選組大人名事典』『新人物往来社刊』が参考になりました。これによれば、島田魁は隊士時代は「シマダカイ」、維新後は「シマダサキガケ」と読ませたとあります。そこでこのときは「カイ」と音読しました。

近藤勇の従者であった兵卒久吉(キユウキチ)もこれで調べました。また、維新に関連して山内家、島津家などの家系図が出てきます。有名な藩主の名前は「コンサイス日本人名事典」(三省堂刊)にも載っていますが、家系図となると歴代全員なので『藩史大事典』(雄山閣刊)を見ます。読みがながついているので助かります。地名は『日本分県地図地名総覧』『全日本地名辞典』(以上人文社刊)などで

ほとんどわかりませんが、古い町名で現在はないものは『幕末以降市町村名変遷系統図総覧』(東洋書林刊)でたどりま

す。他の書物からの引用もあります。

『ゴシップ的日本語論』(丸谷才一著)を読んだ時は、祝詞が出てきました。「奉るうづの幣帛は、ひこ神に、御服は、明るたへ・照るたへ・和たへ・荒たへ、五色(イツイロ)の物、楯(タテ)・戈(ホコ)・御馬(ミウマ)に御鞍(ミクラ)具へて、品品の幣帛献り…」の読み方は、『祝詞事典―平成新編―』(戎光祥出版刊)のふりがなつき書き下し文に頼りました。

『始まりはインドから』(上村勝彦著)の時は『広説仏教語大辞典』(東京書籍刊)を使いました。ほかにも『日本古代遺跡事典』(吉川弘文館刊)から『現代韓人名録』(日外アソシエーツ刊)、医学用語、パソコン用語の辞書まで活用させていただいています。

※引用文中、()内は筆者が加筆。

編集後記

施設・資料・人は図書館を形作る三要素ですが、人がいるからこそ可能になるのがレファレンス・サービスです。みなさんが疑問や問題を解決したい時、情報提供という形でお手伝いする、身近な存在でありたいと思います。